

コミュニケーション能力を育成する指導の研究
ーマイクロ・プレゼンテーションで発表に必要な技術や自信を高めるー

市立 ○○○○ 高等学校 ○○ ○○ (外国語)

1 研究の背景と目的

本研究は高等学校外国語科英語の教科指導において、プレゼンテーションが生徒のコミュニケーション能力の育成に与える前向きな可能性について探るものである。

社会のグローバル化が加速度的に進んでいる時代を迎えている。今や国際競争に耐えうる日本人のコミュニケーション能力向上が「国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策(2011)」でも提言されているように、教育界のみならず産業界で最重要課題とされている。小池・寺内(2010)の中で示されているアンケート調査によると、回答者の85.1%が「国際交渉力を備えたプレゼンテーション能力の必要性」を認めている。しかしながら、今までの学校教育がそのようなニーズに応じてきたとは言えない現状がある。昨今、学校英語教育が手厳しく批判されている理由のひとつに、「先生が文法、解釈を一方的に生徒にやらせ、プレゼンテーション技術や、会議でリードするような英語力と技術の練磨などは、ほとんどやらなかったからである(小池・寺内(2010) p.127)」とある。プレゼンテーションなどの発表する力の指導に消極的だった古い学校英語教育も早急に変革を迫られている。

高等学校段階で国際交渉力を備えたプレゼンテーション能力を育てることは難しくても、基本を指導し、英語で実演することは可能である。学習指導要領での外国語科の目標は「コミュニケーション能力の育成」であり、そのためには英語による言語活動を授業の中心においた4技能を統合的に育成する指導が求められている。プレゼンテーションも取り組むべき活動の1つとして学習指導要領に示されている。プレゼンテーションは目的のある、準備されたコミュニケーション活動であり、成功させるためには4技能をすべて使用しなければならない。Harmer(2001)はプレゼンテーションのような準備された発話は「自然な会話よりもライティングに似ている」としながらも、「プロセス・ライティングで行われているように、最初の考えからプレゼンテーションの完成までその発話が発展していくことは決定的に重要だ」と述べている。これはプレゼンテーションという決まった形でアウトプットする準備の過程で、生徒の論理的な思考法や英語の4技能を育成させることができる可能性を示している。

本研究では、まずプレゼンテーションがコミュニケーション能力の育成に効果的であるという仮説を先行研究から導き(2章)、高校教育現場での具体的な実践例を授業で実際に使用したワークシートと共に示す(5章)。次にプレゼンテーションの評価とアンケートの結果の分析から仮説の検証を行い、最後に本研究全体の考察を述べる(6章)。

2 先行研究と研究仮説

本研究ではプレゼンテーションの準備・実践やプレゼンテーションの技術を使用した表現活動などの時間を総称して「プレゼンテーション活動」という表現を用いることとする。

2.1 アウトプット仮説とプレゼンテーション

なぜプレゼンテーション活動が第二言語習得に効果的だと考えられるのであろうか。Swain

(1985) はアウトプットの機能を、学習者が言いたいことと言えることのギャップに気づかせ、そのギャップを埋める努力が言語習得を促進すると述べている。また、Oxford Dictionaryによると presentation の定義は、“A speech or talk in which a new product, idea, or piece of work is shown and explained to an audience” とある。つまり、プレゼンテーションは聴衆に新しい製品や考えなどを伝えるという目的がはっきりしたコミュニケーション活動である。高い即興性が求められる会話とは違い、学習者は言いたいことを分かりやすく伝えるために、全体の構成や自分の発話形式に注意を向けてアウトプットを自分の中で産出し、修正することが出来る。この過程が第二言語習得をするために効果的であると考えられる。

2.2 コミュニケーション能力とプレゼンテーション

第二言語教育において、コミュニケーション能力モデルを提唱したのは Canale と Swain (1980) である。彼らによるとコミュニケーション能力は言語の知識だけでなく、様々な技術を含む複合的な能力とされている。

【表 1】 コミュニケーション能力 (Communicative Competence) の 4 つの要素

① 文法能力 (Grammatical Competence) : 語彙や文法の知識
② 談話能力 (Discourse Competence) : 結束性や一貫性のある言語を使う能力
③ 社会言語能力 (Sociolinguistic Competence) : 社会的に適切に言語を使う能力
④ 方略的能力 (Strategic Competence) : コミュニケーションを支える言語・非言語手段を適切に使う能力

適切で印象的なプレゼンテーションを生徒にとって第二言語である英語で行うとき、上記の 4 つの要素を無視することはできない。特にアイコンタクトやジェスチャーなどの方略的能力を適切に使用できるかどうかは、Harrington & LeBeau (2010) の中でもプレゼンテーションの相補的な 3 つのメッセージのひとつとして重要視されている。

【表 2】 プレゼンテーションの 3 つのメッセージとその技術

メッセージ	プレゼンテーションの技術
① 身体的メッセージ (The Physical Message)	アイコンタクトやジェスチャーや声の抑揚
② 視覚的メッセージ (The Visual Message)	図やグラフなどを適切に説明・使用する技術
③ 物語的メッセージ (The Story Message)	序論・本論・結論の構成技術

英語でプレゼンテーションするという目標を達成するためには、文法的に正しい英文を適切な場面で産出できるだけでなく、表 2 にあるようなメッセージを適切に使用し聴衆に分かりやすく伝えることが必要と考えられる。そこでプレゼンテーションの 3 つのメッセージに必要な各技術を、コミュニケーション能力を高める技術と考えて授業で指導すれば、英語によるコミュニケーション能力が効果的に高まるのではないかと、という本研究の仮説の一つが導き出せる。良いプレゼンターは良いコミュニケーターという考え方である。

2.3 プレゼンテーションとマイクロ・プレゼンテーションの違い

本研究で提案するマイクロ・プレゼンテーションは準備期間を十分に与えて行うプロジェクト・ベースのプレゼンテーション活動ではなく、日々の授業で扱う様々な話題をテーマとする短時間の即興的に行う活動として位置付けており、プレゼンテーションで特に重要視されるアイコンタクト、ジェスチャー、資料の説明・提示の技術などをトレーニングすることができる。

ここでプレゼンテーションとマイクロ・プレゼンテーションの違いを定義してみたい。マイ

クロ・プレゼンテーションはプレゼンテーションと同じく聴衆に自分の考えを説明するなどの目的を持ったコミュニケーションでなければならない。例えば、「読んだ内容を要約して分かりやすく聴衆に伝える」、「好きな本のあらすじを紹介し、なぜその本が自分にとって特別なのかを説明する」等である。マイクロ・プレゼンテーションは5分以内の発表時間で、発表内容は生徒がすでに背景知識を持っている身近な内容や、リサーチ時間が短時間で済むような話題が望ましい。また、たとえ短い発表でも序論・本論・結論等の論理的な構成を意識するべきである。しかしながら、厳密にプレゼンテーションとマイクロ・プレゼンテーションの違いを線引きすることはできず、比較的短めの発表時間で準備期間が制限されたプレゼンテーションがマイクロ・プレゼンテーションであると本研究では定義する。

【表 3】 プレゼンテーションとマイクロ・プレゼンテーションの違い

	プレゼンテーション	マイクロ・プレゼンテーション
発表時間	目的に応じて様々。TED*では15分前後が多い。	1～5分
準備期間	特に制限なし	1～15分
即興性	低い	中～高い
本研究での取組	プレゼンテーション・プロジェクト (3.2.1 参照)	授業中の表現活動 (3.2.2 参照)

*Technology, Entertainment, Design (プレゼンテーションで有名なカンファレンス)

2.4 研究仮説

プレゼンテーション活動の実践とその技術指導の過程が効果的な言語習得につながるの考えから以下のような仮説を導く。

仮説1 プレゼンテーションの技術を適切に指導し、様々な話題についてのマイクロ・プレゼンテーションを実践すれば、英語によるコミュニケーション能力が向上するだろう。

仮説2 プレゼンテーション活動を実践すれば、英語で発表することに対する意欲が増し、発信することに前向きな態度を育成できるだろう。

3 研究内容・方法

3.1 アンケート (英語学習ニーズ調査)

本研究にあたり生徒の事前と事後の変化を比べるために、アンケートを取る必要がある。また到達度の指標を作成しておけば生徒の意欲の変容も測ることもできると考える。そこで、長沼 (2008), (2009) を参考にして、Can-Do リストの尺度化を試みた。長沼は以下のような基準でそれぞれの活動の到達目標となる行動記述の到達の度合いを4段階に尺度化することによって、活動における到達目標がパフォーマンス評価を可能にする評価項目としても機能する (長沼 2012) としている。

【表 4】 Can-Do 尺度におけるそれぞれの段階の基準 (長沼 2012)

- | |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> ①自信を持ってできない段階 ②自信があまりない学習者でも何らかの補助的な足場があればできる段階 ③多くの学習者にとって目標となりうる達成可能な段階 ④自信のある学習者を飽きさせないような挑戦的課題を設けた段階 |
|---|

本研究では調査項目にプレゼンテーション活動に関する到達度を3項目設定し、スピーキング・リスニング・リーディング・ライティングの4技能の到達度を各2項目設定した。また経

験とニーズの度合いを尋ねる項目も設定し、経験や意欲の測定ができるようにした。

3.2 研究方法と内容

「プレゼンテーション等の発信型の活動ができ、また、なじみのある話題について、英語で議論することができる」という本校普通科2年修了時の Can-Do リストのスピーキングの目標を達成するために、コミュニケーション英語Ⅱの授業で年3回のプレゼンテーション・プロジェクトを実施した。また、教科書を用いた授業にマイクロ・プレゼンテーション等の発表活動を取り入れて、プレゼンテーションの技術をトレーニングした。

3.2.1 プレゼンテーション・プロジェクト

高校2学年普通科では、ネイティブ講師（NTE）または外国語指導助手（ALT）との英語コミュニケーションⅡの週1回のティーム・ティーチング（TT）の時間に年間3回のプレゼンテーション・プロジェクトを行う。プレゼンテーションは独自に基準を設定した Rubric で、そのスキルが適切に使用できているかを中心に評価される。

【表5】 年間プレゼンテーション・プロジェクト計画（高校2学年普通科C-G組）

時期	4月－9月（12時間）	10月－12月（8時間）	1月－3月（6時間）
実演	平成26年9月	平成26年11月	平成27年2月
名称	Persuasive Speech	Kyoto Presentation	Proposal Speech
目標	自分の興味関心のある話題について、証拠を効果的に提示しながら、説得力のあるプレゼンテーションができる。	修学旅行で自分が「新たな発見」をしたことについて、パラグラフの適切な形式を使用して聴衆に分かりやすいプレゼンテーションができる。	研究実践例①（5.1） 学校や社会をより良くするための建設的な意見を提言できる。質問に適切に対応できる。
時間	3－4分	2－3分	2－3分

3.2.2 マイクロ・プレゼンテーションと表現活動

本研究にあたり、コミュニケーション英語Ⅱの教科書を使用した授業において、レッスンの表現活動にプレゼンテーションやディベートの要素を取り入れた。授業中の表現活動として、プレゼンテーションのスキルを意識した活動を繰り返し練習・発表させることで、スキルの定着と内在化を図ることが目的である。これらの4技能統合型の表現活動を行うことにより、プレゼンテーション・プロジェクトでのパフォーマンス向上を目指した。

【表6】 マイクロ・プレゼンテーション計画（高校2学年普通科C-G組）

時期	H26 9月	H26 10月	H26 11月	H27 1月
レッスン	6課	7課	8課	9課
テーマ	宇宙ゴミ問題	iPS細胞	犬の品種改良	報道写真
表現活動	Micro Presentation 研究実践例②（5.2）	Mini Debate	Micro Presentation 研究実践例③（5.3）	Constructive Speech
活動の目標	要約を作成し、画像を適宜使用しながら発表する。	動物の臓器を人間に移植する是非について意見を交わす。	なりたい動物について、証拠資料を提示して意見を述べる。	報道の役目について意見を述べる。

3.3 検証方法

3.3.1 Rubric（プレゼンテーションの評価表）

コミュニケーション能力を検証する方法については様々な議論があろう。本研究では（2.2）

で示した Canale と Swain (1980) の方略的能力 (表 1 参照) に注目し, Harrington & LeBeau (2010) の中で提唱されたメッセージ (表 2 参照) から,

- ①身体的メッセージが効果的に行われているか
- ②物語的メッセージにおける, 序論と結論が効果的に行われているか

を指標とし, ①と②の変容を検証する。

プレゼンテーション・プロジェクト (3.2.1) で使用した Rubric はその内容を評価するとともに, アイコンタクトやジェスチャーなどの身体的メッセージや序論と結論部が効果的にプレゼンテーションに組み込まれ適切に行われているかを 5 段階 (Complete, Extensive, Moderate, Limited, Absent) で評価しており, その数値を検証に使用した (表 7 参照)。

【表 7】 Rubric for Proposal Speech (抜粋)

Proposal Speech Scoring Rubric						Comments
	C	E	M	L	A	
• The student introduces themselves and what they will talk about in their speech.	10	8	6	4	0	
• The student concludes the speech with a clear summary of the main points.	10	8	6	4	0	
Presentation Skills/Delivery						
• The student makes eye contact with the audience.	8	6	4	2	0	
• The student uses effective gestures .	8	6	4	2	0	
Scoring Guide: Complete = All features present Extensive = Most features present Moderate = Some features limited Limited = Few features present Absent = No features present						
Class: No. Name:						

3.3.2 英語学習ニーズ調査

アンケートでは生徒の情意面での変容を測るために, マイクロ・プレゼンテーションについて, 「簡単な資料を使いながら, 短い準備でよく知っている話題に関するプレゼンテーションができる (Micro Presentation)」という項目で生徒の「できる感」を 4 段階で測定した。この数値が高いほど発表することに自信があると言える。また, 「機会があれば, 進んで学習したいか」という質問で, マイクロ・プレゼンテーションに対する意欲の変容を 3 段階で測定した。

4 研究計画

4.1 対象生徒・科目・教材

平成 26 年度	対象生徒 科 目 教 材	2 年生普通科 (中高一貫生を除く C-G 組) コミュニケーション英語Ⅱ 5 クラス (197 名) 4 単位 『Element English CommunicationⅡ』(啓林館)
平成 27 年度	対象生徒 科 目 教 材	3 年生普通科 (アンケート集計は中高一貫生を除く) コミュニケーション英語Ⅲ 7 クラス (275 名) 4 単位 『Element English CommunicationⅢ』(啓林館)

4.2 研究計画

期 間	平成 26 年 6 月 ~ 平成 27 年 10 月		
段 階	第 1 段階 (平成 26 年 6 月~9 月)	第 2 段階 (平成 26 年 10 月~27 年 3 月)	第 3 段階 (平成 27 年 4 月~10 月)
研 究 の 内 容	「研究計画立案」 「先行研究の調査」 ①プレゼンテーション についての先行研究, 指 導実践についての情報 収集	主に「研究仮説 1」の研究 ①コミュニケーション英語Ⅱ の指導法, ワークシートの研究 ②表現活動にマイクロ・プレゼ ンテーションを取り入れて, 短 時間で情報をまとめ効果的で	主に「研究仮説 2」の研究 ①コミュニケーション英語Ⅲ の指導法, シラバス全体, また はプロジェクト・ベースで実施 されたプレゼンテーションの 効果的な指導方法の検証

と 方 法	②効率的な実践方法や 評価方法の考察 ③事前アンケート「英語 学習ニーズ調査①」の作 成・実施	分かりやすい実演を導く研 究・実践 ③効果の検証：事後アンケート の実施・集計，プレゼンテーシ ョンの Rubric やビデオ分析	②シラバス全体の検証，改善点 と提案 ③効果の検証：事後アンケート の実施・集計，プレゼンテーシ ョンの Rubric やビデオ分析
-------------	---	---	--

5 研究実践

5.1 授業実践例① プレゼンテーション・プロジェクト

目的：地域や学校，日本や世界をより良い場所にするための提言を行う 準備期間：2週間
Visual Aid：使用可能（制限あり）

2学年最後の Proposal Speech を例にプレゼンテーション・プロジェクトの実践例を示す。Proposal Speech は「意見主張型」のプレゼンテーションである。「ワークシート1」にあるように，授業3時間の準備時間の中に Brainstorming/Hook/Overview/Main Points/Conclusion の構成でスピーチを書きあげる。今回はポイントを3点に絞る構成法について学ぶとともに，Q&A の対処の仕方についてのプレゼンテーション技術を学ぶ。パフォーマンスは2分以上3分以内で，クラス全員に向けて行う。パワーポイントを使用するがタイトルと Overview のみのスライドであり，基本的にスピーチの作成に集中してもらった。

【ワークシート1】（実際のワークシートの大きさはA4である）

The Proposal Speech Project

What can you do to make a school, a community, a society, or the world a better place? In this last project of English Communication II, you will make a proposal to promote a better future.

High School should promote teaching debate more.
x 4 (x4) (x4) (x4)

Join the debate team!

Why join the team?

1. Develop your English speaking ability.
2. Help improve your opportunities to enter a very good college.
3. High school will be stronger in teaching and studying English.

1. Schedule:

Class	Contents	AB	CEG	DF
1	Orientation/Brainstorming Decide your topic/title Reasons/Research	14 Jan (PC2) Wed	13 Jan (PC2) Tue	
2	Overview 3 main points/reasons Submit the title/Make a poster Write a script	21 Jan (PC2) Wed	20 Jan (PC2) Tue	
3	Peer check/edit How to handle the Q&As Practice	28 Jan (S5) Wed	30 Jan (2E) Fri	
4	Performance Day #1	4 Feb Wed	3 Feb Tue	
5	Performance Day #2	25 Feb Wed	17 Feb Tue	
6	Performance Day #3	4 Mar Wed	24 Feb Tue	

2. Brainstorming:

3. Your proposal: This should be confirmed by your teacher.

4. Three main points or reasons:

5. Storyboard: Your speech should be 2-3 minutes long.

Story Flow	Dai's Presentation	Your Presentation
Introduction (Title) (Greetings)	 High School should promote teaching debate more. x 4 (x4) (x4) (x4)	
Hook	 Join the debate team!	
Overview	 Overview 1. Improve speaking ability 2. Take chances for your better future 3. Get stronger supports	
The point 1		
The point 2		
The Point 3		
Conclusion	 Why join the team? 1. Develop your English speaking ability. 2. Help improve your opportunities to enter a very good college. 3. High school will be stronger in teaching and studying English.	

Class: _____ No. _____ Name: _____

5.2 授業実践例② マイクロ・プレゼンテーション

目的：読みとったパラグラフの内容を説明する 準備時間：5分 Visual Aid：使用可能
生徒は自分の担当のパラグラフを読んで要約し相手に伝える。その際メモを取ってもよいが

キーワードのみとする。この活動で生徒は短い準備時間で各パートの要旨を自分の言葉で説明するために英文を早く正確に読解する必要がある。さらに自分のパート以外ではパートナーのプレゼンテーションを聞き、そこから内容を理解するという4技能統合型の活動である。またこれは最初のマイクロ・プレゼンテーション活動だったので、以下のような特徴がある。

- (1) 序論・本論・結論の構成をワークシートに示した。2.3で示したように、今後行うマイクロ・プレゼンテーションすべてで論理的な構成を求めるために、最初に形をはっきりと理解し、これ以降も論理的な構成を使用することに慣れてもらうためである。
- (2) FeedbackのためのPresentation Checklistを用意し、アイコンタクトと声の抑揚については特に意識させた。聴き手側に積極的かつ客観的に発表を聴く態度を育てるためには発表者へのFeedbackは欠かせない。良い聴き手を育てることは、良い発表者を育てることと同じくらい重要である。

【ワークシート2】 (実際のワークシートの大きさはA4である)

Micro Presentation			
A micro presentation is a short presentation within 5 minutes. As well as a normal presentation, a micro presentation has specific objectives. This time, you will have the audience understand the information in your paragraph.			
TASK: Make a group of three. Give a <i>one-minute</i> micro presentation about paragraph 3, 4, or 5. Decide which part you will take. Use a visual aid of your part effectively. You have 5 minutes for your preparation. Use the chart below to organise your presentation. Please read the passage and write some keywords to make a body part of your presentation.			
	3	4	5
Greetings	Hi, my name is _____.		
Introduction	I will talk about		
	the problem of space debris.	who is working for tracking space debris.	how to chase space debris.
Topic Sentence	Space junk can cause a lot of ().	The scientists work together to keep () of the largest pieces of space junk.	The scientists have to know two things:
Body	● ●	● ●	● ●
Conclusion	I have explained about		
	(rephrase the main topic here)	(rephrase the main topic here)	(rephrase the main topic here)
	Thank you for _____.		
Presentation Checklist			
Name:			
Eye Contact	Good Enough / Okay / No	Good Enough / Okay / No	Good Enough / Okay / No
Voice Inflection	Good / So so / monotonous	Good / So so / monotonous	Good / So so / monotonous
Did you understand?	Very much / Okay / Not much	Very much / Okay / Not much	Very much / Okay / Not much

5.3 授業実践例③ マイクロ・プレゼンテーション

目的：なりたい動物についてなぜその動物になりたいのか説明する。その際、客観的な説明を加える。 準備時間：5分 Visual Aid：使用可能

この課では、自分の意見を支えるサポートの方法を学ぶ。このように、実践例②から③へと段階的にプレゼンテーション技術を発展させていくことが肝要で、生徒に一度に過大な負担をかけない配慮が必要だと考える。本学年では教科書でディベートの基礎を取り扱っており、今回サポートの中に証拠資料の提示を含めた。ワークシートの特徴は以下のとおりである。

- (1) 意見→理由→サポートの順番でプレゼンテーションの本論を構成するようワークシート

を作成した。

- (2) 証拠資料をサポートの中で活用する。その代表的なものは、客観的な説明・例示・統計・専門家の意見である。生徒はディベートに必要な証拠資料の客観的な示し方をこのプレゼンテーションを通じて学ぶことによって、コミュニケーション能力の育成につなげる。

【ワークシート3】 (実際のワークシートの大きさはA4である)

Micro Presentation:

A micro presentation is a short presentation within 5 minutes. As well as a normal presentation, a micro presentation has a specific purpose. This time, you will explain why you chose the animal you want to become with **evidence**. Evidence is an **objective** explanation, example, statistics, or the opinion of an expert in the field that supports your reasons.

TASK: Speaker A will give a *one-minute* micro presentation about the animal he/she wants to become to Speaker B. Try to give two pieces of evidence for the reason. You have 5 minutes for your preparation. Use the box below to organise your presentation.

Greetings
Opinion & Reason
Evidence #1
Evidence #2
Conclusion

Example: Opinion: I would like to become a whale.

Reason: This is because whales can live long and communicate over long distances.

Support:

Evidence #1: Some whales can live longer than humans. Bowhead whales are said to live more than 100 years.

Evidence #2: According to the book published in 1980, "Cosmos" by Dr. Carl Sagan, whales can communicate with each other by using sound over long distances under the sea.

With these abilities, I can talk to a whale even in the Arctic Ocean and travel a lot due to long life. For these reasons, I would love to become a whale.

Speak Up

1. Get into pairs, stand up, and face each other. (Speaker A & B)
2. Speaker A will give a *one-minute* micro presentation.
3. Speaker B will listen to the presentation and report back what he/she understood in 30 seconds.
4. When finished, give feedback to your partner.
5. Switch your roles and try again.
6. Change partners. Repeat this process with a new partner.



Feedback from your first partner

Length	Good Enough	Okay	A bit short
Voice Inflection	Good	So so	Monotonous
Evidence	Objective Enough	Okay	Not Enough
Eye Contact	Good	So so	None

5.4 レッソンのゴールとしてのプレゼンテーション

研究2年目の高校3学年のコミュニケーション英語Ⅲの授業において、各レッスンのゴールとして表現活動を設定し指導を続けた。授業で取り扱ったトピックや文章を基にプレゼンテーションなどの表現活動を最後に行い、アウトプットのためにインプットする授業を実践した。

【表8】表現活動計画 (コミュニケーション英語Ⅲ)

時期	H27 4月	H27 5月	H27 6月	H27 6月
レッスン	1課	2課	3課	4課
テーマ	物語を読む	言語の保存	ヤシ油と環境問題	Grit (気骨)
表現活動	Presentation	Opinion Writing	Mini Debate	Presentation

活動の目標	自分の好きな本や物語を紹介する。	日本が英語を公用語にすることについての意見を書く。	論題: 'To save the environment on Borneo, Japanese companies should stop using palm oil.'	自分の未来について肯定的なスピーチをする。
-------	------------------	---------------------------	---	-----------------------

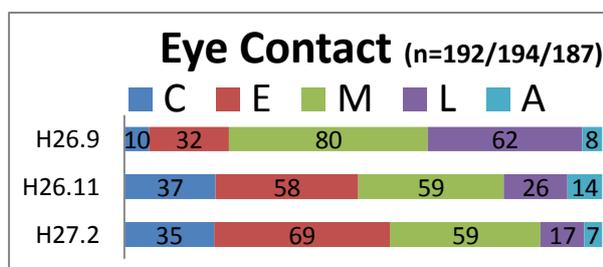
6 研究評価

6.1 仮説1に対する検証

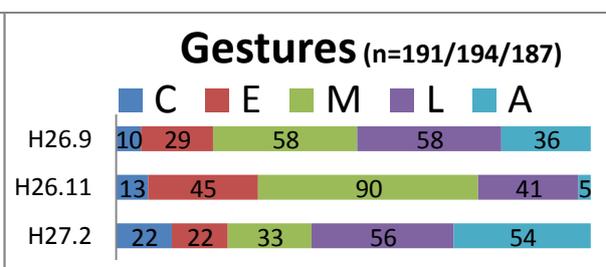
マイクロ・プレゼンテーション活動前のプレゼンテーションの結果 (H26.9) と活動直後 (H26.11) と年度末 (H27.2) の結果を「①身体的メッセージが効果的に行われているか」、「②物語的メッセージにおける、序章と結論が効果的に行われているか」の2点について比較検証した。評価は C, E, M, L, A の5段階 (表7参照) で、それぞれ C: 要求する特徴がすべて現れている, E: 要求する特徴がほとんど表れている, M: 要求する特徴が限定的にしか現れていない, L: 要求する特徴がほとんど表れていない, A: 要求する特徴が全くない, という基準である。またグラフの中の数値は人数である。

6.1.1 身体的メッセージの検証

【図1】アイコンタクトの評価



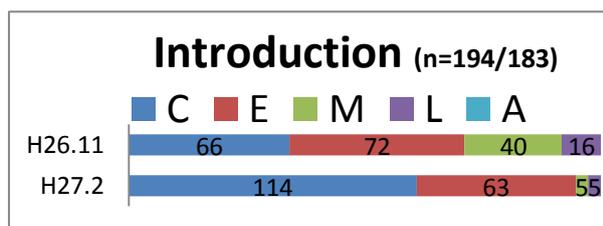
【図2】ジェスチャーの評価



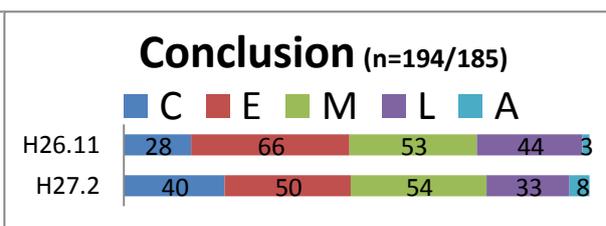
アイコンタクトとジェスチャー両方について、マイクロ・プレゼンテーション活動前と活動直後で大きな変化がみられる。アイコンタクトでは C と E の評価が活動前では全体の約 21% だったが、活動直後では約 2.3 倍の約 49% に上昇し、年度末でも約 56% と 35 ポイント上昇した。活動前に L と A の評価だった生徒は全体の 36% を占めていたが、活動直後には約 21% に減少し、年度末には約 13% にまで 23 ポイント低下した。アイコンタクトは指導の結果改善している。ジェスチャーの評価の変遷から分かることは、活動前に約半数を占めていた L と A の生徒がマイクロ・プレゼンテーション活動直後には、約 24% に減少し、4人に3人はジェスチャーの評価が M 以上に好転した。しかし、年度末には L と A の生徒が再び半数以上を占め、ジェスチャーへの意識付けの継続的な指導の難しさを表しているように思われる。またテーマが提言という抽象的な要素を含むことだったことも、原因の1つと言えるのかもしれない。

6.1.2 物語的メッセージの検証

【図3】序論の評価



【図4】結論の評価



活動前のプレゼンテーションでは序論と結論部の評価を細分化した Rubric を使用したため

に単純に比較することが難しい。ゆえに、序論と結論の評価については、マイクロ・プレゼンテーション直後（H26.11）と年度末（H27.2）の比較とする。序論は劇的な変化がみられる。直後では肯定的な評価である C と E の割合が約 71% 占める結果だったが、年度末ではさらに約 95% の生徒が C と E の評価を得た。序論の構成については定着したと言えるほどの数字である。これは、プレゼンテーションの構成を指導する時点で、自分の提言を 3 点で説明するやり方に固定したからであろう。この結果から、「適切な指導があれば効果的な序論を生徒が構成できるように導くことが出来る」ことが明らかである。結論の評価についてはさほど大きな変化は見られなかったが、年度末に C の生徒の数が増加していることから、結論部をおろそかにせず自分の提言のまとめとして適切に行った生徒が増えたことを示していて、質の向上が見られる。

6.2 仮説 2 に対する検証

英語学習ニーズ調査の回答の一部 13-15 を使用して、マイクロ・プレゼンテーションについての「できる感」、「経験」、「意欲」についてアンケート調査を行った。研究前の平成 26 年 7 月の結果と研究実践直後の平成 26 年 10 月の結果の比較を短期の検証とする。また 1 年後の平成 27 年 7 月の結果（26 年度と比較するために中高一貫生は除く）との比較を長期の検証とする。

6.2.1 アンケート結果の検証①：マイクロ・プレゼンテーションの「できる感」

【表 9】英語学習ニーズ調査（回答 13 抜粋）

【回答 13】簡単な資料を使いながら、短い準備（3 分間）で、よく知っている話題に関するプレゼンテーションができる。(Micro Presentation)

- 1 メモや資料をみながらでも、止まったり不適切な説明になってしまう。
- 2 メモや資料を見ながらであれば、表現に少し問題があってもなんとか説明できる。
- 3 メモや資料を見ながらであれば、大体説明できる。
- 4 メモや資料を見なくても、説明できる。

【図 5-7】マイクロ・プレゼンテーションのできる感（回答 13 集計結果）

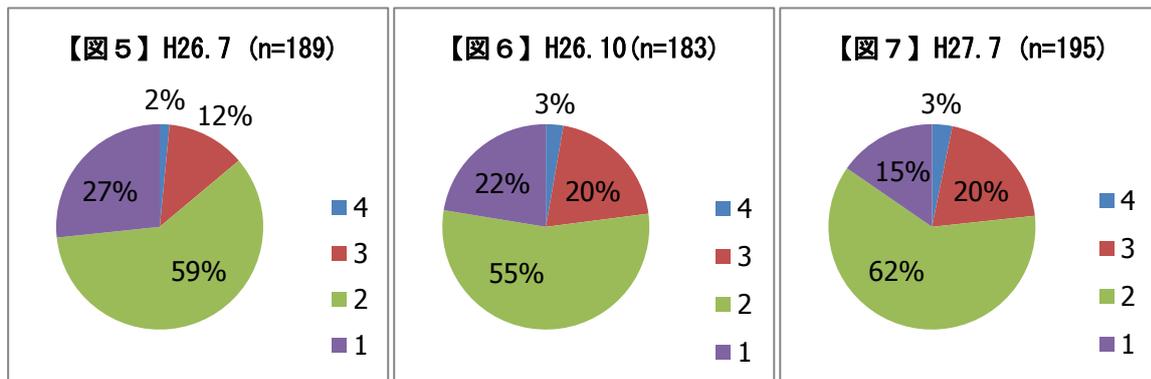


図 5 と 6 を比較すると、「メモや資料を見ながらであれば、大体説明できる」と答えた生徒が 12% から 20% へと 8 ポイント増加し、プレゼンテーションに対する自信の増加がみられる。また「メモや資料をみながらでも、止まったり不適切な説明になってしまう」と答えた生徒がマイクロ・プレゼンテーション活動前には 27% を占めていたが、活動直後のアンケートでは 5% 低くなり 22% となった。この事からマイクロ・プレゼンテーション活動に取り組んだ直後では、当然のことながら「できる感」が上昇し、自信を持つ生徒の割合が増加したと言える。

図 6 と 図 7 を比べると「メモや資料をみながらでも、止まったり不適切な説明になってしまう」と答えた生徒はさらに 7% 減少し、全体の 15% になった。「メモや資料を見ながらであれ

ば、表現に少し問題があってもなんとか説明できる」と答えた生徒は 55%から 62%に増加した。このことから、教科書等の題材を使用してマイクロ・プレゼンテーションなどの4技能統合型の発表活動を継続していくことで、メモを用意するなどの何らかの補助的な助けがあれば「できる」と感じる生徒の層を増やすことができたと言える。つまり発表活動に対する生徒の自信は深まっていったと結論づけることができる。

一方で「メモや資料を見ながらであれば、大体説明できる」、「メモや資料を見なくても、説明できる」と答えたプレゼンテーションにある程度自信を持っている生徒の割合はほとんど変化がみられなかった。対象生徒が2学年から3学年に進級し、表現活動に消極的になる生徒が増える時期のアンケート結果であるとはいえ、プレゼンテーションにある程度自信を持っている生徒たちにさらに「できる感」を育成することはできなかったようだ。

6.2.2 アンケート結果の検証②：マイクロ・プレゼンテーションの「経験値」と「意欲」

【表 10】英語学習ニーズ調査（回答 14・15 抜粋）

【回答 14】今まで経験したことが、1.頻繁にある 2.少しある 3.ほとんどない

【回答 15】機会があれば、1.進んで学習したい 2.できれば学習したい 3.あまり興味がない

【表 11】マイクロ・プレゼンテーションの経験と意欲（回答 14・15 集計結果）

	経験（回答 14）			意欲（回答 15）		
	H26.7	H26.10	H27.7	H26.7	H26.10	H27.7
1	13	25	29	59	67	61
2	105	117	130	111	97	100
3	77	41	30	25	19	28

経験値の変化をアンケートの回答人数の変容で分析すると、マイクロ・プレゼンテーションの授業前の H26.7 から授業直後の H26.10 では、マイクロ・プレゼンテーションを今ま

で経験したことが「頻繁にある」と「少しある」と肯定的に答えた生徒の数が増加し、「ほとんどない」と答えた生徒が 77 人から 41 人に減っている。また 1 年後の H27.7 の数字でもさらにその傾向が進んでいることから、経験値は短期でも長期でも上昇したと言える。

意欲の変化に注目すると、H26.7 から H26.10 の短期では学習意欲は上がっている。マイクロ・プレゼンテーションを機会があれば「学習したい」と答えた生徒が 59 人から 67 人に増え、「あまり興味がない」と答えた生徒が 25 から 19 に減ったからだ。マイクロ・プレゼンテーションの授業が生徒の意欲を上げたと言えるだろう。興味深いことに、H26.7 と一年後の H27.7 の長期の比較ではあまり数の変化が見られない。H26.7 に「あまり興味がない」と答えた生徒の数は 25 人で、この層の人数が H27.7 の時点で 28 人に若干増えていることから、一年間の長期的な取組にもかかわらずプレゼンテーションに対する意欲を改善したとは言えないだろう。

6.3 結論

以上のことから、次を今回の研究実践の結論とする。

（結論 1）プレゼンテーションの技術を適切に使用するように指導して、様々な話題についてのマイクロ・プレゼンテーションを授業で実践すれば、生徒のプレゼンテーションの構成力や発表時のアイコンタクトなどの質が向上し、英語によるコミュニケーション能力が上昇する。

（結論 2）プレゼンテーション活動を実践すれば、生徒の発表の経験が増えるとともに、発表することへの自信が高まる。

6.4 考察

プレゼンテーション活動を英語の授業の大きな柱として普通科全体の新しいシラバスを計画し実践しながら本研究に取り組んだ。同じ学年を教える同僚の先生方の協力なしでは、学年全体でこのような新しい取組を行えなかった。また、プレゼンテーション指導の中で、実演の為に練習することで技術が向上し自信を深めていく生徒達の姿を見て、本当に励まされた。ここで本研究に係ったすべての人に感謝の意を表明したい。その上で本研究中に明らかになった問題点について考察してみたい。それは仮説2の検証(6.2参照)で明らかになった、上位層の生徒の自信をさらに深められなかった問題と長期的な意欲の向上につながらなかった問題である。その原因は、研究2年目の3学年時のスピーキングの目標を明確に設定できなかったことにあるように思う。本校では3学年になるとリーディングとライティング指導中心のシラバスである。2学年の英語学習の目標の1つは「自信を持ってプレゼンテーションできる」ことであるが、3学年では「5パラグラフのエッセイを書くことができる」目標であり、プレゼンテーション・プロジェクトをシラバスに新たに組み込むことが出来なかった。上位層の自信をさらに深めさせて発表への意欲を上げるためには、授業中の発表活動だけでなくスピーキング学習の目標となるようなプロジェクトが必要だったと反省している。しかしながら、本研究の新しい取組を担当クラスだけでなく学年全体で行えたことは大変意義深かった。より多くの生徒へ本研究の趣旨が伝わり、コミュニケーション能力の育成に前向きな影響を与えたと確信している。

7 引用文献・参考文献

- Canale, M. and Swain, M. (1980) Theoretical bases of communicative approaches to second language teaching and testing. *Applied Linguistics 1*.
- 外国語能力の向上に関する検討会 (2011) 『国際共通語としての英語力向上のための5つの提言と具体的施策』 文部科学省. 13 February 2015.
(http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2011/07/13/1308401_1.pdf)
- Harmer, J. (2001) *The Practice of English Language Teaching Third Edition*. Harlow: Pearson Education Limited.
- Harrington, D., LeBeau, C. (2009) *Speaking of Speech New Edition*. Macmillan.
- 小池生夫 (監)・寺内一 (編) (2010) 『企業が求める英語力』 東京: 朝日出版社.
- 長沼君主 (2008) 「Can-do 尺度はいかに英語教育を変革しうるか—Can-do 研究の方向性」 『ARCLE REVIEW』 No.2. 14 November 2014.
(http://www.arcler.jp/research/books/data/html/data/pdf/vol2_3-3.pdf)
- 長沼君主 (2009) 「Can-Do 評価—学習タスクに基づくモジュール型シラバス構築の試み」 『東京外国語大学論集』 Vo.79. 11 July 2014.
([http:// repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/56418/1/acs079005.pdf](http://repository.tufs.ac.jp/bitstream/10108/56418/1/acs079005.pdf))
- 長沼君主・永末温子 (2012) 『Teacher's Manual LANDMARK English Communication I ⑦ Can-Do リスト解説書』 大阪: 新興出版社啓林館.
- Swain, M. (1985) Communicative competence; some roles of comprehensible input and comprehensible output in its development. In Gass, S. and Maddem, C. (eds.) (1985) *Input in Second Language Acquisition*. Rowley, MA: Newbury House.
- 卯城祐司 et.al. (2013) 『Element English Communication II』 大阪: 新興出版社啓林館.